

巻頭言

医学部付属杉並病院の1年を振り返って

杏林大学医学部付属杉並病院 病院長
市村 正一

医学部付属杉並病院は2024年4月1日に開院いたしましたので、約1年が経過しました。そこで、これまでの経過と今後の課題について述べてみたいと思います。

まず、新病院として最も留意した点は、患者さんに迷惑をかけないシームレスな診療を提供することでした。幸い、大きな混乱もなく外来運営ができました。大学の医局も苦しい中、貴重な医師を派遣していただいたおかげと各診療科に感謝しております。

外来部門について、新病院では地域の医療機関との連携を推進し、慢性に経過した患者さんを積極的に紹介しました。このため、外来患者数は15%ほど減りましたが、以前にはなかった医療機関からの紹介も増加し、紹介率と逆紹介率はそれぞれ60%、70%以上と大幅に改善しました。結果として単価が上昇し、外来稼働額はむしろやや増加しています。また、4月からは紹介受診重点医療機関に認定されることになり「紹介される病院」に変わろうとしています。一方で、やはり外来患者数の大幅減少は問題であり、MRIやCTなど高額機器の利用頻度が低いことも課題です。このため次年度は午後に専門外来を設けるなど外来運営を見直して、外来患者数や高額機器活用の増加を図る予定です。

入院について、病床稼働率は当初の4、5月を除くと平均は約74%でした。残念ながら80%を超えた月はありませんでした。当院の入院患者の約6割が救急からですが、夜間や休日の救急車の応需率が低いことが問題です。このため特に若手医師への救急教育が喫緊の課題の一つと考えております。大学と異なり当院では医師個人の裁量がより大きくなりますので、ぜひ若い医師には思う存分実力を発揮していただきたいと考えております。

また、手術件数も大幅に増加し、特に眼科手術数の増加が顕著です。これまで当地域ではできなかった緑内障や網膜硝子体手術などが可能になったのは大きな変化です。麻酔科関与の手術件数も過去最高のレベルですが、麻酔科医師の不足が大きな課題の一つです。急性期医療を支えるためにも手術件数のさらなる増加は必須ですので、今後も努力いたします。

当院の小児科は24時間365日診療しており、杉並区と中野区で東京都の小児科二次救急医療機関に指定されているのは当院だけです。しかし、この小児診療を継続するには経験豊富な医師の確保が必要で、これも今後の課題の一つと考えております。

杏林ではこれまで優秀な卒業生の活躍の場が少なかったことから、当院の存在は今後ますます大きくなると確信しております。また杉並区では中央線より南は甲州街道に至るまで総合病院は当院しかありません。この広いエリアにおける当院の潜在的な可能性は非常に高いものがあります。今後も小児診療を継続しつつ、他の診療科についても患者さんと地域の医療機関から選ばれる、名実ともに「信頼される病院」になれるように努力してまいります。